

956-21

自昭和 50 年 4 月 1 日
昭和 50 年度 至昭和 51 年 3 月 31 日

事 業 報 告

決 算 報 告 書

財団法人 日本常民文化研究所



956-21

昭和 50 年度事業報告・財産目録・貸借対照表・損益計算書並に損益処分
案は次の通りであります。

昭和 51 年 6 月 1 日

財団法人 日本常民文化研究所

理事長	有賀 喜左衛門
理事	河 岡 武 春
"	桜 田 勝 徳
"	波 沢 雅 英
"	杉 本 行 雄
"	二野瓶 徳 夫
"	官 本 馨 太 郎
"	官 本 常 一
"	山 口 和 雄
監 事	小官山 若 木
"	高 木 一 夫

目 次

- (一) 事 業 報 告
- (二) 貸 借 対 照 表
- (三) 損 益 計 算 書
- (四) 財 産 目 録
- (五) 損 益 金 処 分 案

(一) 事 業 報 告

昨年にひきつづいて行われた第2回民具研究講座は、国学院大学久我山高校において開催した。今回も盛況裡におわり、充実した内容であったとの高い評価を得た。また講座参加者を母胎として日本民具学会の発足をみたことは斯学の発展のために画期的なことと云えよう。

ただ河岡常務理事が年度当初より健康を害したので、事業全般に若干の支障をきたした。そのため笠研究会は中断を余儀なくされた。が、48年4月から継続している民具研究会はつづけられた。

水産庁資料館よりの所蔵古文書目録の編纂委託は、後半の2年目で約3万5千点の整理を終え、「水産庁資料館所蔵古文書目録-北海道・岩手県編」(51年3月)を刊行した。

民具マンスリーは第8巻を終了し、会員も510人(年度末)に増加し、待望の500人台を超えた。

『民具辞典』については、本年度内のとりまとめが出来なかった。

956-21

昭和50年度

財産目録

昭和51年3月31日現在

公益部

資産の部

建物 5,722,566
 備品 232,296
 有価証券 38,051,800

第二綱町レヂデンス813号室購入 550,400 円
 会議用机, 椅子, 書架, リコービ-他 283,750,000
 清水建設 7,905 株 1,050,000
 山一公社債 2830 口 1,430,400
 山一ファミリ- 100 口 1,154,000
 東京電力 1,101 口 2,968,000
 神戸製鋼 10,000 口 2,524,000
 東京ガス 26,000 口 500,000
 新日本製鉄 21,000 口 1,000,000
 第一勧業銀行銀座支店 定期預金 500,000
 協和銀行麻布支店 " 1,009,074
 " " 普通預金

預金 25,090,074
 元入金 25,307,435

収益部運営資金として元入

負債の部

101

基本金

通常財産 41,761,100
 積立金 24,902,014
 出版準備積立金 2,100,000
 未払金 129,525
 立替金 502,000

第一勧業銀行銀座支店 定期預金 500,000
 清水建設 2,000 株 (評価) 300,000
 前期より繰越分
 既往年度益金繰入
 益金中より創設
 水産庁委託事業1~3月分源泉税
 " 古文書目録製作費他

収益部

資産の部

預金 110,865
 繰入損金 19,904,238
 棚卸在庫高 850,000
 仮払金 228,375
 貸付金 60,000

協和銀行麻布支店 普通預金 100,185
 港区三田台郵便局 振替貯金 10,680
 既往年度に於ける損失繰入額
 既往刊行図書残部
 民具辞典原稿料

負債の部

元受金 25,307,435

運営資金として公益部より元受

101

956-21

昭和50年度

損益金処分

昭和51年3月31日現在

公 益 部			
当期益金	2,638,564		
処 分			
		出版準備積立金へ繰入	300,000
		積立金へ繰入	2,338,564
収 益 部			
当期損失金	4,133,859		
処 分			
		繰越損金へ繰入	4,133,859

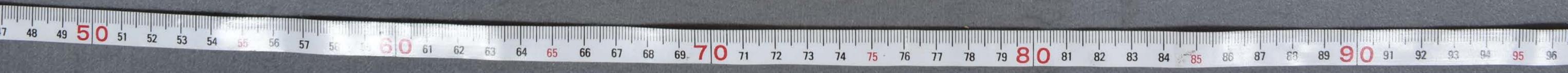
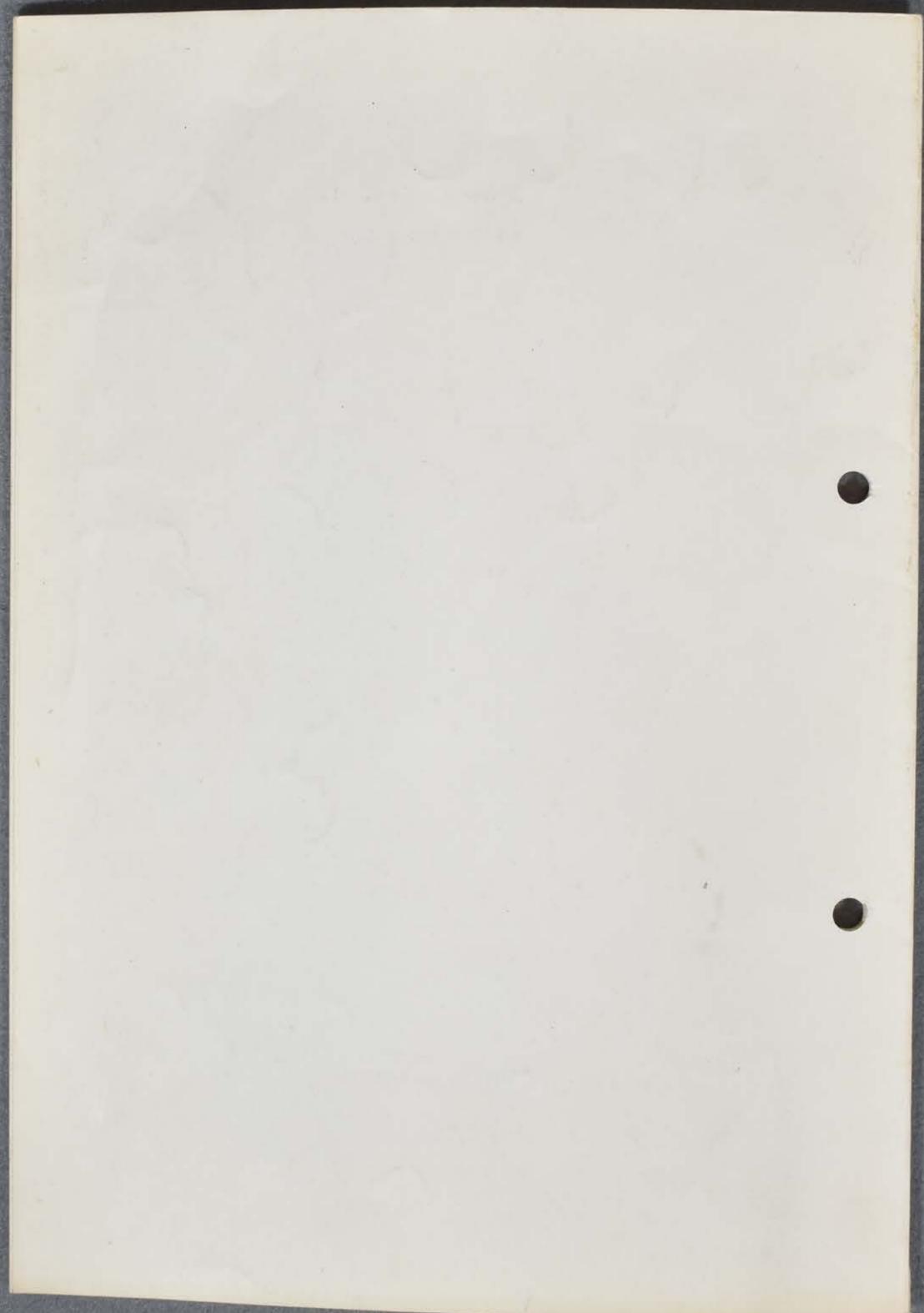
決算報告書と出納諸帳簿を照合いたし相違ないことを証明します。

昭和51年6月1日

小宮山 若 木 印



956-21



956-8

昭和 51 年度

事 業 計 画

収 支 予 算 書

財団法人 日本常民文化研究所

(一) 事業計画

一昨年秋、本研究所の開設五十周年記念事業として開設された「民具研究講座」は、早いもので今秋第3回を迎える。幸い時宜を得て好評に迎えられ、斯学発展のために慶ばしく思われる。また、昨年の講座参加者を母胎にして設立された日本民具学会の年会と、日を接して会場を同じくして行われることは、一つの画期をもたらすことが予測される。本講座もこの期におおむね定着する筈である。

つぎに、講座のメインテーマを「海洋民族文化」としたことは、多少は釜研究会の発展であり、さらに「漁業制度資料筆写本」の整備の結果でもある。研究所の陣容は非力ではあるが、これが総合課題で、少しずつその成果をまとめていかなくてはならない。

釜研究会は中断しているが、民具研究会はさらに活潑となり、遠隔地からの参加者もふえ、本格的なものとなっている。ここでの報告を活字にして活用することも望まれる。

水産庁資料館よりの「漁業制度資料筆写本」約35万枚(250字詰原稿用紙)の内容目録の作成も始められる。これにより本資料の活用の道が開かれることになり、しばらく中断していた漁業史関係の仕事もこれを機に復活させることがいよいよ可能になった。

I 「民具研究講座」の拡充

上記のごとく、民具講座は当初の意図を超えてその役割はますます大きなものとなってきたと云える。今回は方法論検討なし、民具調査・整理の実務のほか、民具の保存科学と博物館設計の新分野を加えた。

このほかアチック以来の漁業関係のテーマが拡大，総合化され，ひろく「海洋民族文化」を対象とするようになった。その第1回を講座に盛ることができた。なお，無形を主とする民俗学から，有形への関心をひき出すために，信仰民具のテーマをとりあげた。これを通して，広汎な民具学の推進につとめていきたい。

II 「漁業制度資料筆写本の内容目録」の作成

戦後，昭和24年に降行われた漁業制度資料事業のうち，残された筆写本の活用をはかるために，従前にひきつづいて，国学院大学近世史研究会の有志を中心にして，本格的な整理にとりかかる。このことは戦後アチックのいわゆる終戦処理から脱皮して，日本漁業史研究の復活が約束されるであろう。

III 「釜」「民具」「博物館」研究会

まず，民具研究会は各月（民具学会，東京地区研究会と交互に行われている）となったが，本格的な報告が行われている。民具研究会を母胎として，昨秋から博物館研究会も毎月開催されている。これは広義の博物館学を民具部門を中心にして模索するものであり，周辺の民俗博物館などを回りつつ，そのあり方を検討することも行っている。今後期待をもちうる。

釜研究会は，そのあり方を再検討せねばならぬが，カード資料はふえており，地域博物館との提携のうえで，まとめていきたい。

昭和51年度収支予算

収入の部

項目	区分	金額	備考
預金利息		150,000 円	
株式配当		2,500,000	
出版物売上金		500,000	
委託費		0	
民具マンスリー		1,500,000	
民具研究講座		875,000	
雑収入		100,000	6,625,000 円
基本財産取りくずし		4,380,000	
計		10,005,000	

支出の部

項目	区分	予算額	備考
役員給		3,840,000 円	24万円×16
職員給		2,320,000	145万円×16ほか
会合費		10,000	
旅費交通費		300,000	
消耗品費		100,000	
印刷費		50,000	
通信費		400,000	
共益費		100,000	
光熱水道費		50,000	
資料収集費		100,000	
調査旅費		100,000	
民具マンスリー		1,500,000	3,000円×500人
民具研究講座		875,000	3,500円×250人
労賃		100,000	
公租公課		50,000	
備品費		10,000	
雑費		100,000	
計		10,005,000	

956-8

